

超の概念

滋賀大学大学院教育学研究科（高度教職実践専攻） 教授 松原伸一

1. はじめに

筆者は既に「ICT超活用」という表現を使用して、新しいICT活用の提案を行っている（松原2018）。そこで、本稿では、「超」について少し考察を行いたい。なお、前号（通算15号）では、「超多様社会」、「超高齢社会」について記述している。併せて参照願いたい。

2. 「超」の概念

ICT超活用における「超」とは、従来の活用を超えることを意味することは言うまでもない。しかし、特別企画を進めるにあたり、「超」の視点をより具体的に、かつ、明確にする必要があった。ここでは、その概念を整理して述べることにする。

(1) 超社会：Ultra-Society

筆者は既に「デジタル社会の情報教育」（松原2002）を上梓し、その「まえがき」には、次のように記述している。

…（前略）…

IT革命により現実世界はますます仮想化し、仮想世界はますます現実化する。私たちの周辺の情報は、もはやどの程度正しくて、どの程度妥当なものなのかを判断することはきわめて困難な状況である。情報技術を利用することにより私たちの生活は便利になったけれど、その反面、種々の複雑な問題を内在する社会が誕生しようとしている。私はこのような社会を「デジタル社会」と呼びたい。…（後略）…

また、「ソーシャルメディア社会の教育」（松原2014）では、その「まえがき」にて、次のように記している。

人類は2つの“価値ある空間”で生活している。その営みは、現実社会の物理空間と限りのない仮想空間とが重畳したマルチコミュニティの中で成立している。…（中略）…

結局のところ、社会の情報化はメディアの社会化とともに、情報の社会化という現象を生じ、ソーシャルメディアとしての存在感を顕著にしている。その結果、ネットワーク上に形成された複数の仮想世界と多重化した空間（マルチコミュニティ）にまで影響が及んでいる。…（中略）…

このように、ソーシャルメディアによりマルチコミュニティを形成する社会を「ソーシャルメディア社会」と呼び、…（後略）…

一方、内閣府（2016）によれば、「Society 5.0」とは、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会としての（第5期科学技術基本計画）。

以上のように、「社会」に対する見方・考え方としては、およそ、現実社会と仮想社会の対比の上に成立するものである。この構図は今も変わりが無いが、今後は、「現実社会」と「仮想社会」を明確に区分することは困難であり、それ故に、この枠組みを超える社会という意味で、筆者は「超社会」というキーワードを使用し、その関係概念として、「超媒体」、「超知能」、「超環境」などの用語を使用し、これらからの12年（Next Dozen）を構想している。

(2) 超媒体：Ultra-Media

前述のように、筆者は、「社会の情報化」とともに「情報の社会化」と「メディアの社会化」を考察している（松原 2014）。メディアの社会化は、いわゆるソーシャルメディアを連想させ、それを基軸とする社会はソーシャルメディア社会と再定義できるだろう。このようにメディア研究はこの視点において重要な概念の集合体である（伊藤 2015）。しかし、メディアは、社会化するだけでなく、コミュニ

ケーションとしての実体化としてとらえる方が妥当であるかもしれない。McLuhanの「メディアはメッセージである」という言説は、メッセージ（情報）を伝播するための媒体として機能するのではなく、その実態であるという意味で捉えればわかりやすいだろう（McLuhan 1964）。

すなわち、媒体はメッセージの発信者自体と一体であることを意味し、それは、分かりやすく表現すれば、「媒体の人間化」といえるだろう。すなわち、メディアは、媒体としての機能を超えているのである。このような状況を認識し、筆者は、「超媒体」という用語を使用している。

(3) 超知能：Ultra-Intelligence

Shanahan（2016）によれば、超知能は、全脳エミュレーション、汎用人工知能の先にあるもので、脳ベースの超知能、超知能の意識、超知能の自己認識、超知能の感情と共感、安全な超知能、超知能の道徳性、など多岐にわたり深い考察がある。このような状況を踏まえ、人工知能研究における超知能（Superintelligence）とは、「人間の知能よりもはるかに賢い知性」とされた。そして、Kurzweil（2007）のいうSingularity（技術的特異点）とともに出現している。

筆者は人工知能研究というよりも、社会やコミュニティや人間とのかかわりに関心があり、人工知能や超知能はその点で考察に値するものと考えている。そこで、筆者は、超知能をUltra-Intelligenceと表現し、人工的に作られた人間と同程度又はそれ以上のデジタル頭脳としている。これは、言うまでもなく、その頭脳は即時にコピーが可能だけでなく、加速的に伸長するものであり、超社会において、人間（知能）との連携の中で成立するものでなければならないと考えているのである。

(4) 超環境：Ultra-Environment

情報環境とは、情報に関わる環境といえるがわかりにくい。情報にアクセスし、その処理（加工）ができる環境で、具体的には、コンピュータやタブレット、スマートフォンなどの情報端末や、そのネットワークを含む情報機器の操作を可能とする環境と考えている。したがって、この度の超環境という概念は、超社会、超媒体、超知能などをベースに情報にアクセスし、それを利活用する環境は従来の範疇を超えている。このような状況を踏まえ、筆者はこの状況を超環境と表現している。

参考文献

- Kurzweil, R., 徳田英幸（2007）NHK未来への提言：レイ・カーツワイル 加速するテクノロジー，日本放送出版協会。
- McLuhan, M. (1964) UNDERSTANDING MEDIA-The Extension of Man, McGraw-Hill Book Company, New York／栗原豊，河本仲聖 [訳]（1987）メディア論 人間の拡張の諸相，みすず書房。
- Shanahan, M. [著]／Chen, D. [訳]（2016）シンギュラリティー 人工知能から超知能へ，NTT出版株式会社。
- 伊藤守編（2015）よくわかるメディア・スタディーズ 第2版，ミネルヴァ書房。
- 内閣府（2016）科学技術基本計画（閣議決定），2016年1月22日閣議決定，
- 松原伸一（2002）デジタル社会の情報教育～情報教育を志す人のために～，開隆堂。
- 松原伸一（2014）ソーシャルメディア社会の教育～マルチコミュニティにおける情報教育の新科学化～，開隆堂。
- 松原伸一（2018）情報学教育の記念すべき年（2019年）に向けて－ICT超活用（Ultra ICT Practical Use）－，情報学教育論考，Vo.5, pp.19-26。